

日本温浴の史話

早稻田大學教授 中桐 確太郎

日本の温浴は文化史上特異の現象であつて、世界稀に觀る所のものである。これが國民精神の上の有形、無形に與へた感化、影響は頗る大なるものがあらうと考へられる。古來日本民族には清淨潔白を尙ぶ特性があるが、其の原づく所は、或は此の温浴の風に存するのではあるまいか。尤も之を反面から觀て、清淨潔白を好む特性が、洗浴の盛行を促したとも感ぜられるが、何れにしても兩々相關係してゐることは争はれぬと思ふ。

事實上日本人ほど温浴を好む者は他にあるまいと思はれるが、其の原因は日本民族の前住地の氣候の影響にありはすまいか。即ち我等の祖先が曾て南方の熱度の高い雨濕の地に住んでゐた爲に、斯かる習慣を得たのではあるまいか。現にサモア、ファイチー邊では、盛に水浴する風があつて、少しの水溜り

でもあれば、直ちに飛込んで洗浴する。私の此の推測が當つてゐるか否かは、人類學上慎重に研究を要する問題であるが、上代日本人に此のサモア人的風習があつた事は國史の上にも明らかに觀られる。即ち『古事記』の景行天皇段には、倭建命が、出雲建と共に肥ノ河に御入沐になつて、御自身先づ河からお上がりになると、出雲建の佩いてゐた刀を、豫て用意の木刀とすりかへて、遂に建を誅戮されたと云ふ話が書かれてゐるし、『日本紀』では崇神天皇六十年の條に類似の記事があつて、それには出雲振根と云ふ者が其弟飯入根を誘うて、「共ニ淵頭ニ到テ」、弟に、「淵ノ水清冷、願ハクハ共ニ游泳セムト欲フ」と告げ、「各々佩刀ヲ解キテ淵ノ邊ニ置テ水中ニ沐ム」と出てゐるのである。斯の如く水浴の事が正史に載つてゐるのを見ても、如何に日本人が古來洗浴を好んだかゞわからうと思ふ。

洗浴すると、自然の結果として、垢や汗などの汚物が滌除され、身體が清潔になるから、随つて體外の異臭に對する嗅覺が鋭敏になる。日本人が殊に死穢を嫌うたのも、恐らく屍臭を厭ふことから來てゐると思ふ。觸穢の制令は全く是等の慣習の法律化したものである。如何なる場合が觸穢に當るかの各實例は、『本朝世紀』『中右記』『明月記』などに色々出てゐるが、例へば、甲に穢があれば、甲の家に入つた乙及び乙の同座者は皆穢に觸れ、乙が更に丙を訪問すれば、丙及び丙の同座者は又穢に觸れると云ふが如く、其の波及の範圍は頗る大きいのである。斯かる觸穢者は當然神事に關與することを禁遏せられ

るのであるが、而も其の穢惡は、洗浴と云ふ淨化手段を経ることに依つて解除せられるのである。一年二回六月、十二月の大祓の行事も斯様な事に淵源してゐるのである。

大祓も、中世になつては餘程形式化して、實際には身をそゝがず、單に供物を献げて、それに心身の罪穢を讓つて川に流すとか、或は物を供へて罪の贖ひにするとかの行事があるに止まつたが、これは支那の影響であつて、古くは皆川邊に出て、實際に其の身を洗淨したものである。

斯の如く清水で身をそゝぐ事に依つて心身の淨化を圖るのは日本人古來の傳習であるが、私は之を禊の思想と名ける。此の思想は時代と共に發達して種々の姿を現すに至つた。水浴に代る溫浴淨化の如きは、殊に其の著しいものである。卽位式後の大嘗會に於て、天皇廻立殿に御し、先づ御身を清めさせ給うた後、悠紀殿の祭儀を行はせられ、終つて廻立殿に入らせられて、御清めの後、主基殿の祭儀を行はせられることは、周知の事實であるが、此の廻立殿と申すのは、平たく云へば御湯殿である。國家の大儀である大嘗祭に當つて、必ず建てなければならぬ重要な御殿が三つある中に、御清まはりの爲の御湯殿卽ち廻立殿が入つてゐると云ふ事は、皇室に於かせられて、神代此のかた如何に清淨を重んじ、洗浴の事に意を注がせられたかを明らかに證示するものである。

二

大嘗會は天皇御一代御一度の大儀であるから、殊に齋み清まはつて其の御儀を行はせ給ふのは勿論の御事であるが、順徳天皇の『禁秘御抄』後醍醐天皇の『日中行事』などを拜見すると、天皇は平日にも毎朝御入浴遊ばされた様である。御浴槽は圓形のやうに承つてゐるが、毎朝辰の刻に、其の中でお湯を召されるのであつて、御洗浴が終ると、側侍の女官が或る物を土器に入れて差上げる。主上はそれで玉體を御こそげになつて、其の後に土器を戸に打投げさせられる。と、其の音を聞きつけて藏人が弦打をする、と云ふのが恒例である。斯く朝毎に鄭重な儀式をしてお湯に召されると云ふのは、總て政は祭事であるとお考へになつての御禊であらうと拜察する。大江匡房の『江家次第』を見ても、抑も元朝の四方拜から始まつて歳晩の追儺に至るまで、凡そ宮中の儀式の度毎には、必ず鄭重なる御沐浴の儀が行はれてゐる。湯浴みは宮廷生活の大部分であると申してもよい。明治天皇に於かせられても、お儀式の時は勿論、平日でも毎朝四時頃には御起床御入浴遊ばされたと申す事を澤男爵から承つたが、是等の事は全く禊の精神を御尊重遊ばされる思召に出た事と恐察せられる。

畏くも御代々の聖上の禊御尊重は、抑も皇子として御降誕の時から始まつてゐる。それは御産湯の儀であつて、近く昭和年間にも其のお儀式が立派に行はれたことは周知の事實である。

お儀式の有様は、『紫式部日記』『榮華物語』などにも委しく出てゐるが、元永二年に鳥羽天皇の中宮璋

子が後に崇徳天皇と成らせられた皇子顯仁親王をお生み申された時の記事は、最も委しいから、それに據つて大略を云ふと、御湯殿始のあつたのは五月二十九日であつた。式場には寢殿の一間を以て當て、東西及び北の三方には高さ五尺の白屏風を立て廻らし、南面には几帳を置き、簾を垂れ、其の中央に浴槽をすゑられた。お湯は普通に沸かすのであるが、其の水は特に目出度い方角から汲んで来て、それが沸いて槽内に湛へられたところで、加持僧が祈禱を始め、金、銀、瑠璃、瑤瑤、瑪瑙、眞珠等の寶を小さい絹布の囊に入れたのを、其の湯の中に浸す事をする。斯の如く準備を整へて待つてゐると、御降誕の皇子は宮内官に抱かれさせ給うて産室からお出ましに成る。九卷本の榮華物語には、其の時の模様か晝に成つてゐるが、先づお行列の先頭には、虎の頭を持つた女官が進み、其後に皇子が續かせられ、更に其の後に續いて、御父陛下からの賜劍を捧持した女官が參るのである。此のお湯殿始の時に虎の頭を持つて來る事は、いつ頃から始まつたのか明かでないが、これは魔よけのお呪ひであつて、最初は之を御産湯の中へ一旦浸して引上げたのを、後には單に影だけを映して、あとは御側近のお机の上に載せて置く事に變つたやうである。又別にウチマキと云つて米を撒く事もするが、これも惡魔拂ひの爲である。お湯をおつかはせ申すのは、御湯殿と其の副手である御迎湯との二人であるが、其の時室外には、讀書の博士と鳴弦の役人とが參候して讀書鳴弦の事がある。此のお儀式は今もあつて、一昨年のお湯殿

始には三上博士が讀書のお役で服部宇之吉博士が副、昨年は服部博士が正で、三上博士が副役であつた。私は其の御役奉仕の時の御模様を三上博士から承つたが、建築物の様式が昔とは違つてゐるので、少々は趣の違ふ所もあつたやうである。昔はイザ皇子御入浴となると、讀書博士は高欄に立つて孝經、史記又は日本書紀の中で、男御子、皇女それぞれの御一生の御鑑戒と成るべき一節を撰んで讀んだものであるが、今日は御浴室の次室といふ事に成つてゐる。又鳴弦のお役も、昔は五位十人、六位十人と云ふ多人數であつたが、今日では正二人、副二人に減せられた。そこで愈々御入浴の御事が始まらうとすると、先づ鳴弦役の人が弦打をして、口の中で祓の詞を唱へる。博士の讀書はそれに次いで行はれるのであつて、三上博士の時は、やはり日本書紀の一節を讀まれた。讀書が終ると、鳴弦の人が弦打をしてオウと云ふ。すると又博士が讀書をする。終つて又弦打をするると云ふのがお式の順序で、皇女の場合には鳴弦、讀書共に二回、男御子の時には之を三回繰返すのが定例である。

足利、徳川などの將軍家又は公卿の家々でも、宮中の御例に倣ひ奉つて産湯始の儀式を擧げたやうであるが、皇室の御儀禮は殊に最も嚴そかであつたらしい。

此の御湯殿始の時に、お湯をおつかはせ申すのは、御湯殿と御迎湯との二人である事は、前にも一言して置いたが、垂仁紀には之を「湯坐^{ユマ}」と記してゐる。日本紀の纂疏では此の湯坐を「兒ヲ洗浴スル者」

とのみ解してゐるが、萬葉では「妬」の字をユエと訓ましてゐる。これに就ては古義にも委しい解釋があり、木村正辭博士の評もあるが、『集韻』には、「妬ハ都故ノ切、妬ニ同ジ」とあり、『遊仙窟』には「無情明月故臨窓」とある句の訓を、「アデキナキアリアケヅキノミゾネタマシゲニマドニイル」として、「故」の字を「ネタマシゲニ」と云ふ意に當てゝゐるから、古く故妬は通じて、ユエともネタマシとも訓むたのであらうとしてゐる古義の解釋は、不徹底であると思ふ。しかし、萬葉には此の妬の字を五ヶ所まで用ゐてゐるのであるから、誤であるとも云はれない。私の研究では、女官が色々の世話をするのをも、同じくユエと云つたのではあるまいかと思ふ。又古事記の垂仁卷には、右の湯坐の事を、大湯坐、若湯坐と二つに別けて書いてゐるが、後世仁西上人が有馬温泉復興に際して始めて湯女を置いた時に、大湯女、若湯女を置いたのも、之に關係のある事ではあるまいか。

兎に角、こんな工合で、洗浴といふことは古來非常に重きを置かれてゐるが、心身淨化の爲にする禊は、清冽なる水の中で行つてこそ意義があるのに、それがどうしてお湯になつたかと云ふと、私は温泉の影響であらうと思ふ。それから一方では又、盛に温泉の功德を説く佛教の思想が入つて來た事に由つて、一層温泉の風が助長され、茲に日本固有の禊の思想が長足の發達を遂げた事も、見のがしてはならぬ事實である。

佛教が洗浴を奨励してゐることは顯著な事實であるが、これは基督教徒の考へと比べて面白い對照である。尤も基督教でも初めのうちは必ずしも反對でなかつたやうで、湯屋の中でも説教をしてゐるのであるが、中世紀の半頃から著しく嫌惡の態度を示した。これは多分ローマ風呂の淫蕩氣分に對する反感から來たものであらう。彼等は一様に皆、入浴を罪惡視し、尼僧などは、入浴せぬ事は心の清さと正比例すると信じた。中には一生洗浴せぬ事を誇にした者さへもあつた。又或る傳説に依ると、或る時アフリカの沙漠に近い處で清僧たちが集まつて修行をしてゐるうちに、一個の涌泉を發見したので、それを汲んで風呂を立てると、忽ち神が激怒されて、急に水が出なくなり、遂には飲料にさへ窮した。それで僧たちは驚いて一同斷食した上、謝罪の祈禱を捧げて初めて赦されたとも云はれる。

キリスト教徒が入浴を嫌つた事は此の一例でも明らかであるが、佛教では常に入浴に反對しないのみか、キリスト教の天國にも比すべき極樂淨土には、八功德水を湛へた冷熱自在の浴池があつて、池面には美しい蓮花が咲き、極樂郷の人たちは、其の間に心持よく浴してゐる光景を阿彌陀經、無量壽經などの中に描出してゐる。又温室經と云つて風呂の功德を説いた經典がある。これは大醫王が釋迦及び其の法弟等のために風呂を立て、施した時に、釋迦が欣んで説いたもので、斯の如き施浴をした者は、自分

が一生幸福であるばかりか、安樂に成佛が出来、生れる子孫は皆美しく、其の外にも尙色々の功德があるとて、七つの功德が述べられてゐる。

佛教に於ける斯の如き温浴獎勵の思想は、支那にも入り、日本にも傳はつたが、支那では最初隨分盛に之を實現したに拘らず、直ぐ終熄したのに反して、日本では先づ三四の寺が温浴室を建て始めると、續いて他の寺々も之に倣ひ、非常に洗浴を重んじて、之を修養の機縁ともした。

先づ華嚴宗では、華嚴經の淨行品に入浴の心得があり、又眞言宗では、四種洗浴と云つて、理の洗浴、事の洗浴其の他を説き、浴室に入つては上空と東西南北との五方に五佛を念じて功德に與るやうにと説いてゐるが、更に禪宗では跋陀婆羅菩薩が入浴して大悟したといふので、其の宗の僧徒は、何れも線香を上げお經をあげて入浴する事に定められてゐる。だから洗浴は最も重んずる所であつて、京都五山の第三位で、臨濟派の根元道場たる建仁寺では、代々の住職が、洗浴の功德を縷述して風呂を立てる費用を募集する疏文を必ず書かねばならぬ事になつてゐる。それ等の文章は多く五山文學の中に現れてゐるが、何れも力の籠つた美しい叙述である。

さういふわけで、日本の寺では各宗共に風呂を重んじて、凡そ七堂伽藍の一として、必ず大風呂を建てねばならぬ事に成つてゐたから、温室經の思想は、我が國に於て永續的に實現され、而も益々發展

した。

ところが此の温室經の思想の擴布に一層の伸展を與へられたのは光明皇后である。皇后は聖武天皇を輔けて佛敎の興隆に大功徳を顯されたお方であるが、御自分でも御心密かにそれに就てお誇りになつてゐた。すると或る夜の夢に、空中に聲があつて、后よ誇つてはならぬ、浴室を建て、供養をせねば、まだ完全な功徳とは云へないと戒められた。それで皇后は直ちに浴室を建て、親ら千人の垢を去らうと決心せられた。此の異常な御思立ちは大いに宮廷を驚かせた。主上は勿論の御事、廷臣等も頻に諫止したが皇后の固い御決意は遂に動かず、悉く之を實行に移された。木の香のかんばしい新造の浴室には、多數の民衆が來浴して、遂に九百九十九人まで皇后の玉手を煩し奉つたが、最後の千人目に成つて、見るも汚い一人の癩患者が御前に現れた。皮膚の全面は殆ど化膿して、其の局所から發散する異様の惡臭が室に滿ち、其の傍に居るにさへ堪へ得られない程であつたので、さすがの皇后も一時は花顔を背けて躊躇しておいでになつたが、最後の一人の爲に破願してはと思召して、心を勵まして之を洗うてお遣りになつた。すると此の汚い癩患者は、皇后に對し奉つて、私は此の惡病に罹つて随分久しくなりますが、或る醫者の話に誰かに此の膿を口で吸ひ取つて貰へば必ず全治すると承りました。所が今日まで誰あつて、吸うて呉れる慈悲深い人がないので、未だに惱んで居ります。どうか此の上のお慈悲に、陛下がお

吸取り下さるとは出来ずまいかと願出でた。皇后は此の時大慈悲心を起して、其の見るも汚い患者の化膿した局所の上に唇を當て、頭部から足先まで悉く其の膿をお吸取りになつたが、患者に向つて、私がお前の膿を吸ふた事を他人に語つてはならぬとお口止めになつた。と、其の時患者はフイと立上つたかと思ふと、急に遍身から赫耀たる光明を放つて、「我は東方阿閼如來である。御身こそ此の事を人に語り給ふな」と云ひつゝ、覆郁たる佳香をあとに残して昇天された、と云ふ説話がある。歴史家は此の御事蹟を單なる傳説に過ぎないと觀てゐるやうであるが、併しそれに就ての反證は一つもないばかりか、浴室をお建てになつた事は、立派に記録にも載つてゐるのである。全部を夢にして丁ふことは決して出来ない。光明皇后の此の大悲願が事實であるとすると、これは確に溫室經の思想に一步を進めて、單に僧侶ばかりでなく、一切衆生に浴湯を施された大功徳の發揮である。淨土の行事を其のまゝ此の現世に現されたのである。

今其の一二の實例を云ふと、癩患者の救濟を以て著聞してゐる忍性上人が、曾て南都にゐた時には、般若坂の北山にあつた十八間の棟割長屋の一隅に浴室を設けて、乞丐、行路病者の輩を集めて入浴させ、且つ治病の手段を講じたと云ふ事であるが、其浴室が今日もなほ蹟を留めてゐる。これは今から約十年程前に、縣廳の手で五十圓に拂下げられて、或る染物屋の所有に歸したので、其の脇へ建増をして、既

に染物工場に改造されようとする運命に陥つたのであつたが、恰も私が其處へ行き合はしたので、驚いて黒板博士に訴へて、再び縣廳へ買戻して貰つたのである。今では史蹟の一として指定せられ、將來長く保存される事になつてゐる。見たところは如何にも汚いものであるが、光明皇后の御志を承繼した忍性上人の事蹟を語る古建築物として尊重すべきものである。此の忍性は後に鎌倉へ赴いて、極樂寺の開山となつたが、其處でも又盛に癩患者の救済と施浴に力を致してゐる。古圖にも其の浴室と患者の收容室とが描出されてゐるが、浴室は壞れて、今では只浴用の水を汲んだ井戸だけが遺り、患者の收容所の蹟には江島電車の車庫が建つてゐる。

斯の如く一般民庶の爲に浴湯を施すと云ふ思想は、忍性に至つて一層廣い範圍に實現せられたのであるが、後にはそれが又再轉して、先祖の供養の爲に浴湯を施すといふことが行はれた。實例は幾らもあるが、例へば吾妻鏡には、後白河院の御追福のために、北條義時が、風呂を立て、百ヶ日間施した事、並に尼將軍政子の成佛得脱のために、毎月六日を限つて、僧侶に洗浴させた事が出てゐる。足利氏の日記類には、更に多くの此の種の記事が散見してゐる。

後世俳句の季題に入つた「雁風呂」の如きも亦、此の思想の一つの現れであると思ふ。歳時記には、「秋、雁の渡る時、小さき木をくはへ來る、是を海上に浮べ、其の上にて羽の勞れを休む。其の木を南

部外ヶ濱邊に落しおき、又春、その木をくはへ歸るに、残れる木多くあるは、人に捕られ、又は死せし雁のあれば也。故に其の木を拾ひ、供養の爲に、風呂を焚きて諸人に浴せしむと云ふ」

と記してゐる。これは西洋などには類のない美談であり極めて詩的な事であるが、此の思想は、重源上人に至つて、更に益々發展した。重源は謠曲「安宅」の中で辨慶が讀上げる勸進帳の終末に、「斯程の靈場の絶えなんことを悲みて、俊乗坊ちようげん諸國を勸進す」とある僧侶である。平重衡によつて焼亡された南都東大寺の大佛殿を後白河法皇の思召で再建する事となつた時に、最初は法然上人が命ぜられたのであつたが、法然から更に重源に委嘱して、重源が専ら事に當つたのである。

此の重源上人は非常に入浴の好きな人で、大佛殿造營の事を幹してゐる間に、大風呂を立て、供養し、廣く復興工事の關係者に入浴せしめた。其の蹟が今も大湯屋として遺つてゐる。維新後は寺の物置小屋に使用されて、破壊に瀕してゐたのであつたが、今日では特別保護建造物に指定せられてゐる。鐘樓の北、淨土堂の東にあつて、桁行八間、梁間五間、前面は入母屋造、後面は切妻本瓦葺の堂々たる建築物である。行つて見ると蒸風呂の形式になつてゐたが、それは中世以後に改められたものらしい。楣間に額が掲げられてあつて、それには「南無阿彌陀佛」の文字がある。佛教では阿彌陀と風呂とは格別の因縁もない筈で、一般には薬師如來か寶頭廬尊者又は跋陀婆羅菩薩であるのに、甚だ不可思議な事のやう

であるが、段々調べて見ると、これには面白い縁由がある。重源は大佛殿再建の時に、造東大寺使に任ぜられると共に、文治二年四月を以て周防の國司に補せられてゐる。僧體の國司は聊か奇妙であるが、これは周防國が大佛殿造營費及び材料の供給地に指定せられた爲で、重源は辭令を受けると直ちに周防に下向して、國府の附近に當る佐波郡牟禮村坂本の地に一字を建立し、其の總號を阿彌陀寺と命名した。其の時に上人は不斷念佛云々といふ二個の願を立て、八日の日から十五日まで八日の間、十六人の僧を呼んで晝夜不斷に念佛をさせ、其の期間は毎日湯を沸かして參詣者に供養する事とし、當務の僧たちには扶持を與へて永世之を廢せしめないことを誓うた。古來立願にも種々あるが、湯を沸かして施すことを願としたのは珍しい事である。此の願文は今でも阿彌陀寺文書の中に遺存してゐるが、東大寺大湯屋の扁額にある南無阿彌陀佛の名號は、此の立願と關係があらうと思ふ。靜に湯に浸つて無念無想の境涯に入つてゐることは、即ち此の世ながらの極樂であるから、普ねく諸人に浴を施して此の極樂の心境を體驗させるといふことは佛敎の上から觀ても非常に有意義なことで、これは昔に光明皇后の思想を發揚するに止まらず、更に進んで完成の域に達せしめたものである。

四

温室經の思想が、鎌倉時代に長足の發展を遂げるに至つた經過は、略ぼ上述の如くであるが、此の時

代に至つて、「風呂」と云ふ言葉が俄に古文書に現れて來てゐる。當時の古文書中で、溫浴の記事が最も多く現れてゐるのは日記類であるが、殊に目立つて「風呂」といふ文字が見えるのは『明月記』である。即ち、宇治の新殿參觀記事の中には、明らかに「御風呂所」といふ文字が「御湯殿」と並記されてゐる。惜しい事に、其の「御風呂所」の下が缺文になつてゐて、早稻田大學所藏の寫本、國書刊行會本、帝大史料編纂係の本の何れを調べて見ても、あとが何と續いてゐたか分らないが、前後の文章から考へて、それが溫浴に關係した記述である事だけは確實である。そこで右の記事に據ると、當時既に溫浴室の意味での「風呂」があつた事になるのであるが、此の推定が許されると、『山槐記』に「風呂の東に」と出てゐるのも、やはり其の意味の「風呂」だと見られる。尤も後世の記録には、宮中でも風呂をお設けになつた事が明らかに書出されてゐるが、既に鎌倉時代にあつたと成ると、ずつと時代が遡る。ところで、更に此の事を別方面から證明する材料に『今物語』がある。今物語は、定家卿の異父兄に當る藤原信實の著したものであるが、其の中には「板風呂」の事が書いてあつて、或は後世の附加へかも知れぬが、目のわるい一人の僧が板風呂の構造をよくも知らずに入つて、「わき戸のうちに入て、あなぬのふろやたけたけ」と喚いてゐたので、人々が笑つたと出てゐる。信實は鎌倉初期の人であるから、其の人の手に依つて板風呂の事が記されてゐるといふ事は、『明月記』の記事と相俟つて、其の時代に於

ける風呂の存在を事實づけるものであるが、それでは板風呂とはどんなものか、それが後世の「風呂」とどんな関係があるかと云ふに、私の研究した所では、湯殿が温湯浴であるのに對して、風呂は蒸風呂即ち蒸氣浴を意味したらうと思ふ。

全體此のフロと云ふのは、言語の上から考へて甚だ不明な言葉である。日本語かどうかもよく分らない。柳田國男氏はフロ即ち「室」と同じ意味であらうと云はれたが、ムと通ずるのはブであつて、フトとは通音でない。僅にカハホリをカウモリと言ふのが唯一の例ぐらゐるものである。洞窟を意味するアイヌ語のボル、洗濯屋を意味する拉丁語のフルクも縁が遠いとする、ちよつと考へが附かない。ところが最近宮良氏に聽くと、琉球語では「圍んだ所」を「フル」と云ふさうである。ルはロと互に轉訛し易い性質を持つてゐて、或る地方では現に風呂敷の事をフルシキと云ふやうな例もあるから、これが一番近いと考へられる。

併し、それは只言語の上の研究であつて、風呂が何處から來てゐるかと云ふ問題になると、別に考へ直さなければならぬ。風呂とは元來蒸風呂であつたとすると、當然誰の頭にも考へ及ぶのはトルコ風呂であるが、私はトルコ風呂と日本の風呂とは、全然交渉がないと思ふ。トルコ風呂は即ちローマ風呂であつて、それがマホメットの關係から再びトルコに逆輸入されたのである。これは熱氣浴式の風呂であ

つて、蒸氣浴ではない。蒸氣浴の例を歐羅巴に求めると、ロシアのがそれである。ロシアでは石に熱を與へて之に水を瀉ぎ、それに因つて放發する蒸氣の中に浴する。だから正しくこれは蒸氣浴であるが、湯を沸かして其の蒸氣に浴する日本の蒸風呂とは頗る異つてゐる。尤も先年讀んだ或る英國婦人の古い旅行記（我が維新前のもの）に據ると、クリミヤ半島では、タルタル式の蒸風呂の外にロシア式の蒸風呂もあつて、パイプから出て來る蒸氣中に浴するとあるから、日本の蒸風呂が必ずしも世界獨特のものでないかも知れぬが、それが最も發達したのは日本に於てであつて、而もそれは外國起源のものではないと思ふ。

日本の蒸風呂の起原は、恐らく八瀬の竈風呂から來てゐるのであらう。此の竈風呂は炭竈と同じもので、煙出しの裝置がなく、中で火を焚く設備になつてゐる。入口は約二尺平方ほどの狭いものであるが、火を焚く者も入浴者も皆、其の入口を潜つて行くのである。どうして斯かる特殊な風呂が出來たのかと云ふと、八瀬の民は黒木賣を業としてゐた。黒木とは『雍州府志』に従ふと、土民が「農暇各々斧鎌ヲ腰ニシテ山ニ登リ木ヲ尺許ニ伐リ之ヲ束ネテ窖ニ入ル、之ヲ蒸シテ濕氣在レバ則チ青色忽チ黒ニ變ズ、是ヲ黒木ト謂フ」とある。つまり、炭竈の中で焚いた生木が黒くなつた頃に引出したもので、薪と炭との中間物である。竈の火を消して此の黒木を取出したあとには、長い時間、水蒸氣が濛々と立つて

室内に充滿してゐるが、八瀬の民は其れを利用して入浴し、療病の助けにした、それが抑も竈風呂の根源だといふ風に、『屠龍工隨筆』などにも傳へられてゐる。『都名所圖會』にも同様の記事が繪まで入れて書き出されてゐる。起原は確にはわからないが、傳説に依ると、天武天皇が壬申の亂の時に矢傷を御脊に負はせられたが、此の竈風呂へお入りになると、効驗神の如くして忽ち癒えた、それで所の名を「矢脊」と云つたとの事である。又、元弘の亂の時に、官軍の兵士が多く負傷したのを、村民が竈風呂に入れて治癒させたので、後醍醐天皇から、以來租税を免許するといふお墨附を賜はつたとも云はれてゐる。此處の村民は、皇室の御祖先が九州地方から東にお移りになる時に召伴れておいでになつたものであらう、現に八瀬の村民と同じ骨髄の人々が薩摩にゐる、と云ふ説を、明治の初に或る外國人が發表してゐるが、兎に角皇室と代々深い關係のある事は眞實で、宮中のお湯殿にも八瀬の村民が奉仕したとの傳へもある。

そこで以上の事實を見ると、竈風呂は可なり古い時代からあつたものらしいが、此の竈風呂と類型的な石風呂といふものが、瀬戸内海沿岸の可なり廣い範圍に分布してゐる。四國では伊豫の今治、阿波の徳島、中國では廣島縣、山口縣などにあつて、可なり發達してゐる。今治から約二里程隔たつた所に櫻井といふ海村があつて、昔の國府の所在地に當つてゐるが、其の村では岩窟を利用して窟内で火を焚き、

其のあとに水を播いて、蒸發氣中に浴する方法を採つてゐる。夏季などは千人程の者が入り來て、宛然たる湯治場の觀があると云ふ。年々段々盛になつて、現に去年あたり新に出來た石風呂もあると聞いてゐる。

此の石風呂の起原も、竈風呂と同様に不明であるが、面白い事にそれが朝鮮にもある。若い人は能く知らぬが、朝鮮八道到る所に殆ど行き亘つてゐる。そして中でも開城の町にあるのが最も盛である。此處は李朝の前の高麗朝の都城市で、市民は今なほ高麗の古風を維持し、婦人などは、恰も内地の平安朝の昔を見るやうに、一種の被衣を着てゐるが、此の開城の人々の自慢にすることが三つある。それは第一に墓地の清潔な事、第二に臺所の清潔な事、第三に身體の清潔な事であるが、身體の清潔なのは彼等が好んで、汗蒸所に入ることである。これはハンジンシヨと讀んで、身體を蒸されて流汗を誘發する所、即ち内地の蒸風呂の事である。私は其の組織を實見して來たが、大體に於て八瀬の竈風呂と同一形式に出來てゐる。一回の入浴料は十三錢で、現在の朝鮮の民度としては聊か高きに過ぎるが、一度其の味を覺えたものは到底忘れられないと云ふ事で、大抵隔日には入浴する。そんなわけで町には多數の湯屋が散在し、大きいだけでも六ヶ所程設けられてゐる。そして其の直近には、何れも理髮店と茶吞所とがある。入浴の方法は、凡ての蒸風呂に共通であるやうに、溫室内に入つて扉を閉し、濛々とたてこめて

ゐる水蒸氣に蒸されつゝ暫く横臥を續けてゐると、全身の皮膚から盛に汗が流れ出て垢が浮いて來るから、其の適度の時を俟つて、スツカリとそれを洗ひ落すのである。最初は専ら病毒を去る爲に此の蒸氣浴をしたもので、開城の民は殆ど其の大部分が行商を以て業としてゐる關係上、長い旅行をしてゐる先々で、三毒を受ける。三毒とは第一に旅疲れから來る路毒、第二にリウマチス其の他の病毒、第三に性的な色毒の三つであるが、是等を洗ひ落すのが入浴の目的であつた。ところが後にはそれが漸次に發達して、健康を維持し長命するために入浴する事になつた。之に就て一つの面白いエピソードがある。或る觀相家が、商家の番頭の顔を一見すると、死相が歴然と顯れてゐた、ところが一箇月後に再會して、改めて其の相を觀ると死相が拭うたやうに除かれてゐたので、驚いて聞いて見ると、其の間頻繁に汗蒸所に入浴してゐた事がわかつた、と云ふのが其の話の筋であるが、今日では其の健康長命の爲の入浴から、更に今一段の飛躍をして、趣味のための入浴が行はれてゐる。

五

ところで此の朝鮮の石風呂は、何處から來た風習であるかと云ふに、スキタイ人の間に之と同じ事が行はれてゐる旨を、ヘロドタスの歴史に書いてゐる。其の記事に據ると、三本柱を掘下げた穴の中に立て、其の上をフェルトで蔽ひ、中で石を焼いて、その灼熱した處へ急に水を注ぎ懸け、蒸發する湯氣

の中に浴するのであつて、其の快味到底希臘式蒸風呂の比ではないとある。スキタイ人が人真似の嫌ひな種族である處から觀て、恐らく最初此の風はスキタイ人の間に發して、東西に分れ、次第に遠い地方に及んだのではないかと想はれるが、兎に角、現在知れてゐる處では、西はフィンランド、ラブラントから、スウェーデン、ノルウェー、東はシベリアからエスキモー、アラスカ、アメリカあたりにも、石風呂浴の風が伸びて行つてゐる。尤も細部の構造は各地方でそれぞれ異つてゐるが、其の中で我々とつて面白いのは、アメリカインヂアンが、掘上げた土を其の汗浴所の前へ積み重ねて、其の上に野牛の頭骨を魔除けとして載せて置くことである。昔、我が國で將軍世子の産湯の時などに、虎の頭を持つて來る事と對比して、非常に興味があると思ふ。又、エスキモーでは、締め切つた集會所の中で小便を火にかけ、其の湯氣の中に裸で浴するとの事であるが、これは少し珍談すぎるやうである。

私の想像では、此のスキタイ式石風呂の分布線が東に伸びてカラフトを通過するに當つて、一支線を南に派生して朝鮮を通り、更に瀬戸内海を過ぎて、伊勢に達した、それが後に云ふ伊勢風呂ではないかと考へる。

大槻茂質の書いた『環海異聞』といふ本がある。仙臺の船子の津太夫といふ者が、シベリアに漂流して、ロシア内地に入り、時の女帝にも謁見して、十二年ぶりに歸國した際に、仙臺侯の命で、大槻が其

の漂流譚を記録したものであるが、其の中にイルクティックの記事があつて、同地の風呂の有様が、圖まで挿んで可なり委しく書いてある。それを見ると、浴場は二室にわかれてゐて、兩室の間には穴を通じ、階段があつて、手前の室で石を火に焼いて水を注ぎ懸けると、その湯氣が隣の室へ入つて、入浴者がいゝ工合に蒸されるやうな設備になつてゐる。斯ういふ一種の蒸風呂が、既にシベリアにあつたとすれば、それが朝鮮へ来て、朝鮮から更に日本へ来たらうといふ事は、容易に考へられる所である。今日では全く破壊されて了つたが、曾て宮島にあつた弘法大師御夢想の石風呂の如きも、全然同じ系統のものである。そこで其れが到頭伊勢まで来て、可なり久しく行はれてゐるうちに、特別に清潔を好む日本人として、それでは満足が出来なくなつて、新に湯を沸かして其の蒸氣の中に浴するに至つた。それが即ち日本の蒸風呂であらうと思ふ。

六

さて、以上は風呂の起原論とも云ふべきものであるが、確實に風呂といふ文字が文献に現れてゐるのは、前にも述べた通り鎌倉時代からで、風呂が流行したのも、同じく其の時代からである。惟宗允亮の著書にも、上下風呂を好んで浴湯を好まないのは、わるい事だと云ふ意味の記事がある。近頃出た『日本風俗史講座』の中で、江馬務氏が、蒸風呂は既に平安朝からあつたと書いてゐられるのを見たので、

これは面白いと思つて早速聞合せたが、確な返事に接することを得なかつた。鎌倉時代の宮中に最早風呂があつたとすれば、民間には其の已前からあつたらうとも推測されるが、遺憾ながら證據がない。今の處では、平安朝にはまだ風呂が無かつたと云ふ外はない。

蒸風呂の建築の最も古い形が、どんなものであつたかはまだ知られてゐない。建築物としての蒸風呂で、今日に残存してゐるものは、僅に京都邊の寺々に特別保護建造物として保存せられてゐる温室くらゐなものであるが、それすら大半は破壊に瀕してゐる。東福寺のも随分古いが、先年行つて見ると、殆ど廢頽し盡し、家根の如きも雨の漏るに任せてあつた。大徳寺、妙心寺も同様の状態である。今日完全に残つてゐるものはと云へば、只飛雲閣の黄鶴臺だけである。これは實に立派な湯殿で、其の流し場の一隅には別に破風造りの一室がある。前には戸が立てられてあつて、一見戸棚のやうであるが、其處を開くと、中には柵があつて、其の下は切子になつてゐる。これは蒸氣を通すための装置で、其處に横臥してゐれば、程よく蒸されるやうに出來てゐるのである。元聚樂第にあつた豊臣秀吉浴用の湯殿を移したものだといふが、岡湯と水の設備もあり、奥には刀掛などもあつて、それに續いて中には階段がある。すべてが桃山式の立派なもので、戸をあけると前は直ちに池に臨み、舟を持つて來れば湯殿から直ぐ乗込めるやうになつてゐる。ケンフェルの日本史に據ると、これは確に蒸風呂に相違ないが、是等の寺と

か貴族邸にあつたものを別として、一般人の爲の町風呂も、當時大いに流行したらしい。恐らく今日の銭湯も、蒸風呂から初まつたらうと察せられる。

尤も町風呂では一人浴、二人浴の場合と異つて、多人數が出入することであるから、只一枚の戸を立てただけでは、開閉毎に蒸氣が放散して冷め易い。そこで例の破風造の別室の前に、又一枚別に板戸を作つて、湯氣の出ぬやうに設備したらしく、博物館の古い扇面圖には、さうした圖様が描き出されてあるのを見た。明治十二年頃に出版された東北旅行日記に、弘前市で蒸風呂に入つた記事が出てゐる中にも、やはり戸を開けて入るのだと云ふ事が書かれてある。蒸風呂の古い形が、田舎に形見として残つてゐるのであらう。

ところが、後には、一々開閉して出入することに不便を感じ出したので、板戸の代りに上から深く垂れ下つて定着してゐる障屏物を設け、其の下を潜つて出入することを發明した。これが後の柘榴口の起源である。英一蝶の描いた丹前風呂の畫で見ると、漸く這つて潜り込む程の間隔である。ところが其の後の風呂の畫を、段々時代を逐うて蒐めて見ると、此の垂れ下りは次第に高くなつて行つて、同時に湯舟は益々下降し、遂に今日見るが如き温泉式の風呂となつて來てゐる。即ち其の意味で觀て、柘榴口は中間時代を表してゐるといふことが出来る。

そこで次に問題となるのは、鎌倉、室町の時代に盛を極めた蒸風呂が、いつ頃から湯風呂に成つたかと云ふ事であるが、尾張屏風の畫にあるのは、まだ蒸風呂である。これが今日のやうな湯風呂になつたのは、蒸氣浴では何度も湯を立て直す必要があつて、其の度毎に人手も要れば、又、薪も餘計に要つて、旁々不經濟であるところから來た事であるが、それも中間的には、半は湯の中に浸り、半は湯氣に蒸される半氣半湯の浴法が行はれた。つまり、湯から稍高く離れた切子の上に横臥して、其の下から來る湯氣で蒸される從來の蒸風呂に對して、其の切子を湯の中までずつと下げて、湯に浸りつゝ蒸される戸棚風呂の形式を考へついたのである。たしか西川祐信の畫には、それが出てゐたやうに思ふ。

此の式の風呂は、私の想像では、すゝ風呂から考へついた事と思ふ。小瀬甫庵は、すゝ風呂が朝鮮征伐の時から出來たとしてゐるが、當時の諸將の征戰日記を色々調べて見ると、各其の陣所に風呂を立て、浴湯を饗應してゐる。それ等は恐らく飛雲閣式設備の風呂であらうと察せられるが、下々の兵士は無論さういふ風呂に入ることには許されないから、そこで必要上案出したのがすゝ風呂であるらしい。一寸考へると、すゝ風呂を以て蒸風呂代用にするといふことは困難のやうであるが、これには實證がある。私は先年近江に行つて不思議な風呂に入浴させて貰つた事があるが、それが即ち蒸風呂式のすゝ風呂で、つまり周圍を閉ぢこめて入る装置に出來てゐたのである。此の式のもものは、近江の各地方にある

が、八幡には殊に澤山にある。種別も様々で、蓋をしたまゝ、窮屈な出入口から這込んで、中で躊躇浴をするやうに出来てるのもあり、又、寺の潜り門式に、天蓋式の蓋の上に紐がついてゐて、押せば開き、放せば自然と蓋が閉ぢて来て、スツポリと頭の上から被さるやうに出来てゐるものもある。蓋も竹製、藁製さまざまある。これは確に簡單な形式を採つた蒸風呂であるが、近江からは可なり遠く離れてゐる佐渡の島にも同形式の風呂がある。佐渡出身の山本氏は好んでそれに入浴するといふが、此の二つは全く相似てゐる。私は假に之を近江佐渡式の風呂と命名した。それから又、近江佐渡式とは少し異つて、首だけ出して身體を蒸される装置のものが、四國の讚岐にあつて、繪草紙などに其の實況が出てゐる。畢竟何れも朝鮮陣の實驗から得た考案であらう。

蒸風呂が湯風呂に代つて行つた過程は上述の如くであるが、一旦湯風呂式の味を知ると、不徹底な蒸風呂式では最早満足が出来なくなつて、漸次に湯浴的に傾き、遂にそれが所謂柘榴口の湯風呂にまで進化して行つたのである。此の柘榴口のこといた錢湯風呂は、明治の中期頃には大半無くなつたが、唯一つそれが大正五年まで東京の高田町にあつたのを覚えてゐる。今日は柘榴口が全部撤廢せられて、温泉式のものとなつて了つてゐる。

次に、風呂の生活の事を少し話して置きたい。

抑も入浴の目的には三つある。第一は宗教的意味に於ての入浴、第二は治病且つ健康保持の爲の入浴、第三は趣味娛樂の爲の入浴であるが、此の目的上の區別は、其のまゝ之を洗浴發達史上の三個の階段と見ることが出来る。併し宗教的意味に於ての洗浴は、所謂禊時代の事實であるから、之を蒸風呂のみについで云ふならば、畢竟療病と趣味娛樂との二つに歸する。さういふ次第で、後世に所謂湯治と云ふ言葉にも此の二目的が含まれてゐるが、前にも述べた如く、初期の蒸風呂は南無阿彌陀佛を念じ極樂淨土を觀じて入浴したのであつて、東寺の風呂などもそれである。後には之が弘法大師御夢想の風呂と呼ばれて、月々一定の日に湯を立て、諸人を入浴させるに至つた。京都では曾ては市中の湯屋にも大抵蒸風呂があつたものであるが、今日では殆ど絶えて了つて、只東寺だけに蒸風呂が残つてゐるのである。

東寺の蒸風呂は、洗心寮といふ建物の脇にある。大體に於て飛雲閣のに類してゐるが、勿論多少の相異がある。十年前には建物を入ると休息所があつて、其處に病人がゴロゴロと横臥してゐる。湯殿は其の室と廊下を一つ隔てた隣で、内部は暗く、入浴者は其中で洗浴して出て來る設備になつてゐたが、後には二階造りに變つて、多くの人が來浴するに至つたので、幾分娛樂的に傾いて來てゐる。其の外、大垣には、純粹療病目的の蒸風呂がある。これは日本に蒸風呂がないと思つて作つたもので、百草を煎じ

出した湯の中に浸つて蒸されるのである。入浴者は下部の狭い出入口から入るのであるが、中も狭いので、立つて三人、腰かければ二人しか入れない。又九州には、温泉を利用した療病目的の蒸風呂が別府の鐵輪にある。建治三年に一遍上人が、地獄を埋めて造り建てたものだと言説のあるもので、全く石風呂式に出来てゐる。浴室は石の洞窟を利用したもので、其の上には七佛薬師像がある。中央に一大石柱があつて、其の周圍に十六の石枕が配置されてゐる。一回に十六人宛入浴して、各其の石を枕に横臥して蒸されるのであるが、室内が狭いので足を伸ばすと壁でつかへる程である。出る時には最も入口に近い人から順次に出るのであるが、外には次の番を待つて約三百人ほどの者が待構へてゐる。これは非常に面白い事實で、大阪の菊池幽芳氏も其の委しい状況を書いてゐる。私も曾て實見した。

別府には、右の蒸風呂の外に、砂風呂があるが、これも一種の蒸氣浴である。朝鮮の京城でも漢江の河砂の中へ全身を没して顔だけ出して入つてゐるが、これは希臘の或る島でも行はれてゐる砂浴法で、砂の下から来る温泉の蒸發氣に蒸される別府の砂風呂とは異つてゐる。何れにしても療病保健の爲のものであるが、これも漸次に趣味娛樂化して來てゐる。

八

入浴が趣味化し娛樂化するに至つたのは、いつ頃からの事か、確な事は固より分らないが、既にもう

鎌倉時代から其の萌芽はあつたやうである。室町時代に入つては、正月は勿論の事、節季々々には風呂初と云ふ事が行はれて、其の日に、將軍が伊勢守の春日第に赴いて、酒などを飲み、祿を施した由が當時の日記に見えてゐる。飛雲閣のも、同じく趣味娛樂のためのものと思はれるが、委しい事はわからなう。

寺に於ての浴室は、普通に宗教的な目的のものとのみ考へられるが、これも或る時代以後は、趣味娛樂の爲の傾向を段々帯びて來てゐる。一遍上人は元來天台の人であつたが、後に太宰府の聖達上人の感化を受けて淨土宗に入り、熊野に籠つて研究を積んでゐる中に靈感に觸れて新に融通念佛宗を開き、其の喜を頌たんが爲に、九州に聖達上人を訪づれた。すると上人は非常に喜んで、早速風呂を結構して、共に浴し、打解けて宗教上の話をしたといふ。これは一遍上人繪卷に畫入で出てゐる有名な話であるが、久しぶりで遙々と出て來た法弟と共に入浴して、打解けた話をするといふ心持は、療病的ではなく、確に上品な意味での趣味娛樂的である。

又、大乘院の座主の教覺上人といふのは、文明年間、足利末の人であるが、此の人は毎月三四回宛、頗る贅澤な風呂入をしてゐる。教覺の日記に據ると、當日は浴室の中を色々裝飾して、畫幅をかけ、花を生け、珍羞を列べ立て、風呂で酒盛をしたのであつて、長生殿、竹林の七賢などを作り、龜の口から

酒が出るやうな仕掛までもしたといふ。斯うなつては實に、すばらしい純娛樂である。此時分の僧侶の生活を描寫した畫の中にも、寺の風呂場へ女を呼び寄せて僧侶が飲酒してゐる所が描いてある。西洋で同様の事が行はれたのも不思議に同じ年代である。西洋では温泉の浴室内で酒を飲み又遊び事をしたのであるが、三上博士のお話に従ふと、作州津山附近の湯の郷にある温泉では、湯の熱度が低いので、約十疊敷の風呂場の周圍には棚があつて、其處に酒德利や肴類を並べて、湯に入り乍ら酒盛の出来る設備がしてあるとの事である。入浴をそんな風利用する方法が、早く諸國で行はれてゐた事がこれである。

教覺上人の事は既に述べたが、京都の公卿たちが先祖の爲の供養又は煤拂の後などに、柳風呂、一條風呂などの町風呂で、酒宴をしたといふ記録もある。斯ういふ風に、風呂が酒宴の場所に用ゐられて來ると、男ばかりでは酒間の興が淡いといふので當然女が呼出される。それが抑も湯女の起りである。攝津の有馬温泉は承徳の崩壞以來久しく荒廢のまゝに委せられてあつたのを、建久二年に仁西上人が新に十二の坊舎を造つて、京都の公卿達の入浴に便し、大いに之を中興したのだと傳へられてゐるが、湯女も其の時に上人が初めて置いたのであるといふ。つまり女氣がなくては、入浴に來る公卿たちも寂しからうといふので、大湯女、若湯女の二種を置いた、大湯女は老女で之をカ、と稱し、十二坊を通じて各坊

毎に一人、若湯女は十四歳から十八歳位までの若い女で、これは數多く置いた。此の若湯女は各坊それぞれ源氏名があつて、何れも緋の袴を穿き、白拍子の姿で公卿たちの身の廻りの世話をした。歌詠み字を書くことは勿論、琴、花、茶ノ湯の素養もある都雅な婦人が多かつた。爾來他の温泉でも之に倣ふものが多くなつて、最近なほ其の風が残つてゐる。加賀の山中温泉などは其の一例である。後には町風呂にも次第に湯女が現れることゝなつたが、殊に全盛を極めたのは徳川時代で、丹前風呂の如きは其の代表的なものである。三浦茂信の『慶長見聞集』には、此の頃の町風呂には、なまめかしい湯女が現れ、浴客の垢を搔いたり髪をすいたり、色々の艶な持てなしをして、男の心を惱ますと云ふ意味の事が書いてあるが、大抵一軒の湯女風呂には二三十人の湯女がゐたらしい。大道寺友山の『落穂集』の中にも、友山が若年の頃に實見した光景を記して、

「風呂は朝よりわかし、晩は七ツ時仕廻ひ申し、晝の内風呂入共の垢をかき申し湯女ども、それより身支度を調べ、暮時分に至りゆへば、風呂の上り場に用ひたる格子の間を座敷にかまへ、金屏風などを引廻し、火を燃し、件の湯女共衣服を改め、三線をならし、小歌やうの物を謠ひ、客集めゆなり」とある。宛然たる現代のウエイトレス、ダンサーの態である。斯の如くして湯女が全盛を極め、遂には芳原を壓倒するに至つたので、明暦から寛文頃へかけて度々湯女禁止令を出した。勝山齋で聞えてゐる

芳原巴屋の勝山なども、曾ては丹前勝山と呼ばれて丹前風呂の評判女であつたのが、明暦三年の禁止令に會して巴屋に移つたのである。名妓高尾の事蹟として傳へられてゐる物語は、實は此の勝山の事であるとも云はれてゐる。當時流行の俠客姿で押しあるいたので、勝山は人氣を博したのだとの事であるが、額風呂の小三も其の亞流である。京大阪では稍後までも湯女風呂が残つてゐたらしく、なほ地方の小都會などにもあつたと見えて、西鶴の『一代男』にも、兵庫の風呂屋の事が出てゐる。但し江戸のやうな上品さはなく、何れも下卑てゐたとある。斯ういふ風に三都を初め各地に廣く湯女が行はれたことは、益々風呂の趣味化娛樂化を盛にしたもので、その傳統は滔々として明治時代にまで及んだ。

以上、日本の温浴史について略述したが、日本の風呂は實に日本文化特異のものであつて、西洋には餘り例がない。其の特色を細かく言ひ立て、ゆけば際限がないが、就中最も大きな特色は衆庶皆浴といふ事である。西洋のは單式浴槽であるし、支那には日本の風呂屋に類した混堂があるが、これは専ら賤民の入るもので、頗る汚く、ドロドロに混濁してゐる。見たゞけで到底入る氣のものではない。だから賤民以外の人々は、西洋流の單式浴槽に入るか、さもなければ行水式の浴法を行つてゐる。西洋では唯一つブダベストに日本式の風呂屋があるといふが、兎に角衆庶皆浴といふことは、日本の特色と云つてよい。ローマのは一時に三千人の入浴者を收容したといふが、あれは熱氣浴が主で、自ら趣が違つて

ゐる。其の上に又、同じ温浴をするにしても、日本のは全身浴であるのに對して、西洋のは半身浴である。これも確に日本の風呂の一特色であつて、衆庶皆浴と、温湯全身浴と、此の二つが、日本の風呂の二大特色として見られると思ふ。是等の特色は、種々の方面に良好なる感化影響の多くを及ぼしてゐる。所謂、「平生の氣持にほしや風呂上り」で、湯に入ると、身が清くなると共に心も清くなるから、冠にかゝつた微細な塵までも掃ふ氣になる。これが入浴のいゝ處であつて、古來風呂の好きな人には立派な人格の人が多い。西郷南洲翁の寛容も風呂から來たといふし、大隈老侯も、肝癢が起りかけると直ぐ湯に入つて之を靜めた。だから老侯は曾て餘り怒つた事はなかつたといふが、これで見ても、お湯に入るといふ事が、精神の鎮靜、人格の陶冶の上に、偉大な影響を持つことがわかる。

既に入浴するといふ事のみでも、それ程の偉効があるのに、況して我が日本の風呂屋では、多くの人と一緒に入浴するのであるから、其處に起つて來るのは、みんなの心が一つに融け合ふ感じである。大きな平和と博い愛との心持である。すべて愛の心持は、自他の者が同じ感じに一致した場合に自から湧起るもので、自他一體觀の體驗の中から生れた愛でなければ、それは眞の愛ではない。而も日本の衆庶皆浴では、入浴者全體が一つ心に融合するのであるから、愛と平和の根源は風呂にあると云つてよい。それから又入浴は階級鬭争心を緩和する。凡そ何人も知つてゐるやうに、人間の差別は着物にある。

裸になつて了へば其處には何の差別もない。警官でもユニフォームをつけてゐる時には職務上威嚴を保つ必要もあるが、それを脱いで了へば、寧ろ進んで公衆に親む心持になる。これは軍人でも學生でも同じ事で、着物が人の心に差別感を與へるのである。ところが湯に入る時には、總ての人が其の差別を脱捨て、了ふのであるから、甲乙丙丁皆一個の天真爛漫たる人間である。一切が平等無差別である。みんなが同じく素裸になつただけでも、さうであるのに、それが皆一つの浴槽に入るとすれば、自他の間は温暖なる液體を以て繋がれ、血液の溫度までも渾一に融け合ふのであるから、どれ程人間同士の心を和げ親ましめるか知れない。私は曾て感情の衝突を來してゐた二人の人間が、圖らず同じ温泉に入つたために、翌日は生れかはつたやうな朗らかな心持になつて、互に融和して握手した事實を知つてゐる。温浴が人の感情を融和し、大きな愛の根源になる事は、此の一事でもわかるであらうと思ふ。曾て私は銀行家の集會の席で右の意見を述べたところが、其の中の或る人が云はれたには、我々の中には同じ朝風呂仲間の方が十五人あるが、其の十五人は、夫婦仲でも話せぬ秘密を互に打ちあけ合つて兄弟以上に親んでゐるとの事であつた。是等は全く共浴の効果であつて、西洋のやうに只々權利の主張を競ひあふのではない眞のデモクラシイが其處にある。愛の中から自然に芽ぐみ出た眞の平等が其處にある。斯ういふ氣持を作つてくれるお湯ほど尊いものは恐らく外にないであらう。